
marionette.

ペ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

m a r i o n e t t e .

【Nコード】

N 4 4 8 5 I

【作者名】

ペ子

【あらすじ】

ロボットが人間と紛れていても気づかない時代：ある少年の家にロボットがやってくる。ロボットは少年にとってたった一人の“トモダチ”だった。

白いテーブルクロスから落ちるグラス、一瞬にして形は崩れ粉々になった破片が床に散らばる。荒れる食卓の上からさらに叫び声が重なった。

「何やってんだよ！早くしろ！」

声の主はまだ幼い少年だった。黒髪に映えた白い肌、まるで何もかも威圧するかのような目をしていた。しかし、容姿と正反対に高い声を荒げ命令をしていた。大きな部屋にある盛大な椅子に腰掛け、いた少年の前に、彼の両親がようやく姿を現した。

「遅れてすまなかった、今日はお前にプレゼントがあるんだ」

少年は疑問符を頭に浮かべ首を傾げた。両親の後ろから自分と同じくらいの少年が顔だけを覗かせていた。父親は隠れている少年の背中を押し、椅子に座りながら呆然とこちらを見ている彼に見せる。

「それ誰？」

「退屈しているお前に“トモダチ”を連れて来たんだ」

「“トモダチ”…？」

「高かったけど、あなたの為と思えば安い買い物だったわ」

“トモダチ”…裕福な者達だけが手に入れることができる人型ロボットのことだった。“トモダチ”と言われるのはロボット達がまるで本物の人間のように感情をもち、人間と共に生きることが目的としているからだ。もはや、人間の中にロボットが隠れていても気づかない世の中になっていた。それほど二つの生き物は密接な関係になっているのだ。

「こんにちは」

「出てけ、俺はこんなoirない。捨ててきてよ」

「まあまあ。最初はぎこちないかもしれないが次第に慣れてくる」

少年は立ち上がりテーブルにあったナイフとフォークをロボットに投げつける。そして大きな声で怒鳴りつけた。

「大丈夫だ。このロボットはお前と“トモダチ”になることがインプットされている。そんなことをしてもお前のことを嫌いになつたりしない」

納得しないように唇を噛み締める。そんな彼を心配そうに見た後、両親は一度ロボットを置いて部屋を出て行った。

彼はもともと気性の荒い性格だった。何でも手に入る環境に気づいた彼は自然と傲慢な少年になっていったのだ。両親はそんな彼を酷く心配していた。外に出ようともせず部屋にこもり、誰とも接しない生活を送っていた少年にはもちろん誰一人“トモダチ”はいない。

荒らされた食卓に見向きもせず、少年は自分の部屋へ戻る。するとロボットもまた彼の後に続き中に入った。部屋で二人きりになり沈黙が続く…、ロボットの少年は部屋を物色しいつの間にかランプを取り出していた。

「これ、やろつよ」

話し掛けられた少年は見向きもせずにベッドに横になる。しかし、ランプがさばかれる素早い音が彼の耳に入る。少年はベッドで寝返りをうつとあの少年が手馴れた手つきでランプをシャッフルし、一枚一枚を慎重に重ねてタワーを作っていた。見向きもしなかった少年は目の前で行なわれている光景を瞬き一つせず見ていた。

「これで完成。すごいでしょ？」

ランプタワーは順序よく並べられ完成していた。

「そんなの俺だってできるよ」

「これは一人でしかできない。僕は二人でやるゲームがしたいんだ」完成したタワーを手で壊し落ちたランプを元に戻す。そして綺麗に束にしたランプをベッドに横たわる少年に差し出した。

「僕は君の“トモダチ”だよ」

差し出されたランプを手に取るのと同時に少年は起き上がる。そのランプはいつの日か使わなくなったランプだった。どんなに楽しいオモチャがあっても一人で扱うとなるとガラクタ同然だった。

「…お前の名前は？」

「君がつけていいよ」

「それじゃ変だ。俺がつけたらまるでペットみたいだろ。お前が決めろ」

少年の言葉にロボットは目と口を動かし微笑んだ…その表情は本物の“人間”のようだった。些細な仕草もランプを持つ手も、すべて人間にしか見えない。

「僕はシン。君は？」

「俺はリユ―だ」

外を見れば二人の少年がボールを蹴り合い遊んでいた。太陽の光が真っ直ぐ彼ら二人を照らしている。リユ―の両親はそんな二人の様子を窓から覗いていた。つい最近まではこんな光景が庭に広がるなんて両親二人にとっても、リユ―にとっても想像できなかっただろう。シンとリユ―は“トモダチ”になり、日々決まった時間にシンがリユ―の部屋に訪れ遊んでいた。ランプはもちろん今ではサッカーや野球もするようになった。

そして一番変化が出たのはリユ―だった。彼は滅多に笑わない少年だった。表情も硬くまだ幼い少年だというのに怒りという感情以外を顔に出すことはなかった。それなのに今ではよく笑い、顔に感情が出るようになっていた。すべてそれはシンというロボット、“トモダチ”の効果なのだろうか。

「今日はお終い、また明日遊ぼう！」

「もうちょっとだけ！シンは俺の“トモダチ”だろ？俺の言うこと聞いてよ」

シンは少し俯き悲しそうな顔をした。リユーは自分が何か悪いことを言ってしまったのか心配になり彼に近づく。パーマのようにふんわりとしたシンの髪は日の光に当たり、より一層色素を失っていた。

「リユー、僕は君の“トモダチ”であって、君の言うことを何でも聞くロボットじゃないんだ。君も最初僕に言ってくれたじゃないか、僕はペットじゃないって」

今度はリユーが俯き苦しそうな顔をしてた。頭では分かっているとは言っても、目の前にいるシンは人間ではなく自分と“トモダチ”になることがインプットされているロボット…その事実をどうしても利用しようとする自分がいた。

「ごめん、シン。じゃあ、また明日な！」

シンは返事をしないかわりに顔をくしゃくしゃにしながら微笑んで彼に手を振った。

体は疲れているはずなのに明日はシンと何をして遊ぼうかと考えていると頭が働いて眠れなかった。彼はベッドから降りて部屋を出て行く。

暗い廊下、あちこちに絵画や銅像が飾られている。昼間はとても美しく見えるのに夜は不気味な物にしか見えない。ある部屋の前を通り過ぎようとした時、微かに聞こえた声に反応し足を止めた。

「…だな」

「そうね、もうそろそろね」

それは自分の両親の声だった。分厚いドア越しからのせいかな何を

話しているのか把握することはできない。ひたすらドアに耳をつけ窺う。

「あと少しだろうあいつは。それまで夢を見させてあげるんだ」
残酷にもその一言がはつきりと正確に少年の耳に届いた。幼い頭脳のはずなのにすべてを諭したように必死に怯える声を抑えるように口に両手をやる。

（俺：死ぬんだ、もうすぐ死ぬんだ）
力が入らない体を引きずって眠れない夜を過ごした。

部屋でくつろぐ二人の間には昨日まであった楽しい雰囲気はなかった。ベッドの上で両足を抱えて小さく座るリユーはいつもと違っていた。シンは椅子から降りて彼の隣に静かに座る。

「リユー、」

「シン、俺はシンと出会えてよかったって思うよ」

「どうしたの急に？変だよ」

「お前がいなかったら俺はきっとあのまま孤独に死んでた」

様子がおかしいのと彼の予想外の言葉にシンは驚いた表情で彼を見る。

「…死ぬ？」

「俺、もう少しで死ぬみたいなんだ」

「冗談でしょ？」

「昨日の夜、親が話してるの聞いたんだ」

シンの驚いた表情に悲嘆の感情が合わされていた、彼は目を見開いたまま口を押さえる。彼も驚きを隠すことはできない。リユーはシンの動揺する姿を見て何故か安心していた。それは自分が死ぬということ誰かに伝えた時、誰一人：自分を弔う人物がいらないと思

っていたからだ。

少年は泣きもせず、あの頃の彼とは全く違う落ち着いた口調で言った。

「俺、シンが“トモダチ”でよかった。シンがロボットでも俺はずっとお前と“トモダチ”だ」

彼は子供らしい明るい笑顔をシンに向けた。シンは見開いた瞳を少し細め苦痛の表情をする。そして彼から顔を背けた。突然の彼の動きにリユーは不思議に思い顔を覗こうとする。

「シン？」

「…ごめん、見ないで」

「どっか痛いの…」

自分から背けていたシンの体を無理やりこちらに向けた。すると彼の瞳から一粒…二粒と滴が零れていた。その滴がシンの頬をゆっくりと滑っていく。シンがもう一度瞬きをすると瞳に溜まっていた涙が止まらず落下した。リユーはシンの目から零れて落ちていく涙を凝視していた。

「どうして…ロボットは、ロボットは涙を流さない、それだけは人間と同じようにできないって…」

ロボットには欠点があった、それは“涙”…どんなに感情があってもそれを涙として表すことは不可能だった。

シンはリユーを力強く抱き締めた。彼は何も言わない、彼はただただ強く彼を抱き締めた。抱き締められた彼は嗚咽に混じりながら必死に訴えた。

「俺まだ死にたくない…死にたくないよ!!」

体が離されシンの手がリユーの両肩を支えていた。リユーの表情は今にも泣きそうな少年の顔だった。しかし、彼の瞳から涙が零れることはない。

「しに…しにた…く…」

リユーは全く動かなくなった。それはもはや電池の切れた“ロボット”だった。彼の冷たくなった頬をシンは両手でつつみ込む。

「よくやったよ」

手拍子が静かな部屋に響き渡る。そこへ入って来たのはリユーの両親だった。しかし、彼ら二人は白衣を身に着けまるで科学者のような振る舞いをしている。

「あまりにもこのロボットは感情に乏しかった。おまけに自分が“本物の人間”だと酷く思い込んでいた。そんな彼を変えさせたのは紛れもない“人間”だったというわけだ」

「ロボットは人間を変える。しかしこの実験で人間がロボットを変えるということも証明させることができましたね」

それは全て仕組まれたものだった。シンはそんな二人の声や姿にせずもう一度リユーを抱き締めた。自分のもつ体温が彼にも伝わるように。静止したリユーの首の裏には暗号のような数字が刻み込まれている。

「リユー…ごめんよ。僕はこうすることでしか君と“トモダチ”になれなかったんだ」

最後まで嘘を吐き続けた少年の目には悔いるように滴が零れ落ちていた。動かなくなつたロボットはきつと彼の目から零れた涙を見て、自分の本当の姿に気づいただろう。

彼らに残されたのは泣くという、愚かで美しい行為だけだった。

（後書き）

サイトに載せているものに訂正など加えたもの。
人間が自分をロボットだと思い込んでしまったり
ロボットが自分を人間だと思い込んでしまった場合、
どうやって区別させるのでしょうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4485i/>

marionette.

2010年10月8日15時26分発行